

## 自責謙遜する日本の母・自己効力感を持つ韓国の母 — 父母の原因帰属スタイルの日韓比較 —

○ 仁平 義明                      大類 純子  
(東北大学文学部) (東北大学文学研究科)  
key words: 日韓比較, 父母, 原因帰属

出来事の原因帰属は文化によって大きく変動する(たとえば、Lee & Seligman, 1997)。ここでは、同じ東アジア文化の中でも、それも、ともに儒教文化の影響を受けたとされる日本と韓国の間でも、まったく異なる原因帰属傾向が存在することを示す調査結果を報告する。とくに、日韓の差異は、「わが子についての出来事」に最も顕著に反映されていた。

### <方法>

小学生以下の子を持つ日本人の父母と韓国人の父母を対象に、原因帰属傾向の質問紙調査をおこなった。日本人の父母は、大学の教職員と配偶者、その知人 48 人、韓国人の父母は、大学への韓国人留学生とその配偶者 59 人、合計 107 人であった。原因帰属についての質問は、5 領域の想定上のポジティブな出来事とネガティブな出来事、計 10 項目：わが子の出来事(志望校合格・不登校)、健康(10年間快調な健康・HIV感染)、仕事上の達成(昇進・左遷)、社会への影響力(応援していた市議の当選・メンバーだった市民運動の挫折)、対人関係(仕事上のパートナーからの好意・親友とのいさかい)。この10の出来事について、原因の内在性-外在性の評定(7・全く自分のせい～1・全く自分以外のもののせい)と、自己による原因のコントロール可能性の評定(あなたの影響力で、7・完全に換えられる～1・全く換えられない)を求めた。さらに、その考えられる原因について自由記述を求めた。

### <結果と考察>

日韓の文化的差異は、原因の自己内在性の評定においてよりは、むしろ原因への自己の影響力の評定において著しかった。

### 原因帰属：

親による原因の内的帰属傾向は、「わが子の志望校合格」で、韓国の両親の方が有意に高かった。ほとんどの日本の親は、「本人の努力・実力」を原因にあげるのに対して、韓国の親では、「家族の努力」「良い環境の提供」など親側の要因もあげられていた。この文化差は、とくに母親間で著しかった。ほかに、「HIV感染」と「仕事のパートナーからの好意」の原因の内在性の評定値は、国の主効果が有意であった(韓国>日本)。しかし、他の多くの項目については、国の主効果はみとめられなかった。いくつかの項目では有意な性差(父>母)がみとめられた。

### 原因への自己の影響力：

原因への自己の影響力の評定では、わが子の問題、仕事上の達成、社会への影響力、対人関係、健康、すべての領域で、有意な(あるいは有意に近い)国の主効果がみとめられた(韓国>日本)。

日本の父母、特に母親たちは、ポジティブな出来事は自分の力によるものではなく、ネガティブな出来事は自分に原因がありながら自分ではどうにもできないとみなす自責謙遜傾向があった。それに対して、韓国の母たちは、ポジティブな出来事もネガティブな出来事も、自分の影響力で変化可能であるという自己効力感を日本人の母よりもつよく持っていた。因子分析による解析でも同様な傾向がみとめられた。

\*質問紙の翻訳・配布にご協力いただいた東北大学情報科学研究科のChoi Hyunchoel氏、配布・回答にご協力いただいた東北大学の教職員の皆様に謝意を表します。

(NIHEI Yoshiaki · ORUI Junko)

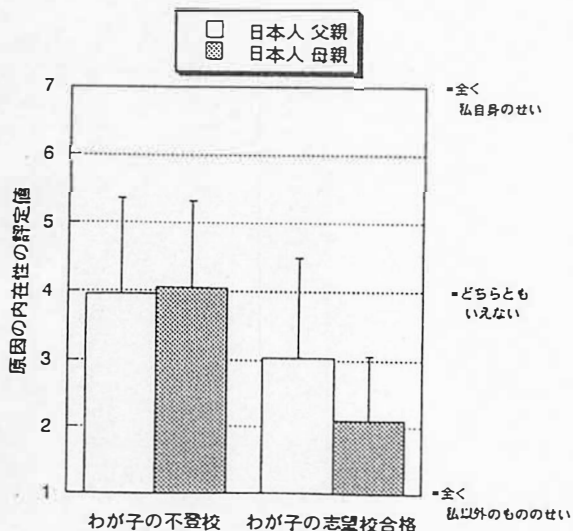


図1 日本人の父母による子の出来事の原因帰属 (不登校・志望校合格)

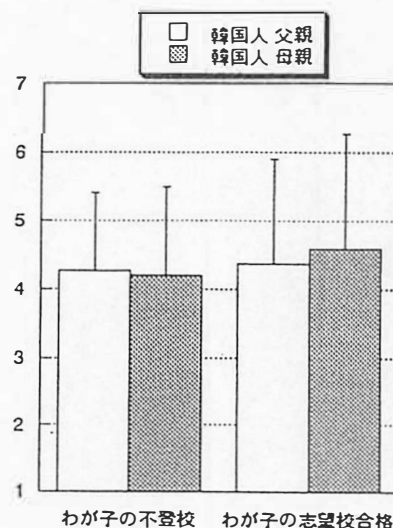


図2 韓国人の父母による子の出来事の原因帰属 (不登校・志望校合格)